# 徳宏傣族景頗族自治州を訪ねた

（ダホンダイ ジンポ）

**4月3・4日**

日本雲南聯誼協会の特命昆明支部長として、初鹿野恵蘭理事長と協会会員の林則幸氏、昆明支部職員の林娜女士とともに雲南省南西部にある徳宏自治州を訪ねた。協会が活動を開始した初期の頃に支援を検討したことがあったが、実現には至らなかった地域である。今回、新たな支援校の調査と3月10日に地震に襲われた盈江（インジャン）を訪問し被害状況を調査することが旅の大きな目的だった。当初の予定では、初日に盈江へ入るつもりでいたが、「地震後の余震がいまだに続いていて危険だ」とのことで入境を断念した。2日間の滞在中、訪問した先々で学校関係者や行政担当者から3月11日の地震に対する見舞いのことばを頂戴した。

徳宏自治州は、その西側と南側で緬甸（ミャンマー）と国境を接し、州内には3カ所の口岸（国境税関）がある。傣族・景頗族と阿昌（アチャン）族・徳昂（ダアン）族・傈僳（リス）族の5つの少数民族が暮らしている。傣族のお祭り「潑水节（ポーシェイジェ）」は「水掛祭り」としてよく知られている。自治州の海抜は800m～1300m、年間平均気温が摂氏18度から20度の亜熱帯地域に属している。昆明から飛行機でわずか50分、州都の潞西（リュウシ）は初夏の沖縄を連想させる清々しい気候だった。

中国では、2009年から学校教育制度の改革が始まった。小学校では県単位での学校統廃合が行われている。山間僻地に点在している小学校を市街地の「中心小学校」に統合するもので、学校と教員を1校に集中することによって、教員の指導力強化と教育レベルの向上をはかろうというものである。これによって、協会が支援してきた小学校のうちの数校が廃校される一方で、中心小学校として拡充される学校もでてきた。今、全中国の省・自治州・市・県教育局は学校の統廃合と新校舎の建築に追われている。

今回訪問した潞西市の芒市（マンス）地区、隴川（ロンチュアン）県、瑞丽市でも、それぞれに新たな中心小学校の建設が始まっていた。完成予想図を見せてもらい、現場を見せてもらったが、いずれもこれまでに訪問した小学校とは比べものにならないほどの敷地面積と設備を整えた、すばらしい学校ばかりだった。だが、建設資金の不足で、校舎は完成しているものの生徒の宿舎や食堂、図書館、体育館、運動場などの設備は手つかずの状況だった。芒市勐戛稳（マンジャウェン）小学校の李校長は「子供たちのために1日も早く完成させたい」と熱っぽく語っていた。自分が生まれ育ったこの村の、この学校で一生を尽くす覚悟だとも。

初日の視察を終え、芒市教育局の扬（ヤン）局長の話をうかがった。扬局長は貧しい山村の出身で、高校生時代に担任教師の注目を集めたいばかりに、担任教師の自転車を壊した。犯人が自分であることを知った担任教師は扬局長を停学処分にした。自分の過ちに気づいた扬局長は勉強に励み、教師になる道を選んだ。大学を卒業した後、小学校教師として20数年のキャリアを経て教育局へ移った。「よい教師がよい生徒を作る」との思いは、その時の経験から生まれたそうで、教師の道を選んだのも、当時の担任教師への「恩返し」だと語った。□□校長も扬局長の教え子の一人だった。

その扬局長が日本で行われたサッカー・ワールドカップをテレビで観戦した際に、試合後の会場にゴミが一つもなく、日本人の公衆道徳、衛生観念の高さに感心したという。中国では「平気寿命5年延長計画」というものがあるらしく、扬局長は教育の目標として学力の向上はもちろんのこと、生徒に公衆衛生の意識付け、「よい習慣と礼儀」を身につけさせることを揚げていた。

2日目。隴川県民族小学校を訪問。学校関係者から建設中の学校施設の説明を受けた後、校内を見学。生徒宿舎横の食堂の裏に学校農園と豚舎が備えられていた。畑は本格的なもので、日本の小学校のクラス農園とは規模も内容も桁違いだ。飼育している豚は生徒の給食の材料にしたり、市場へ売りに出すそうだ。「自力更生」ということばが見た「学習」とか「勤勉」といったお定まりの文言ではなく、子供たちに自ら考えることを問いかけることばが、この学校の教育を物語っているように感じた。全体主義の中国にあって、独自の教育方針を実践していることにも少々驚いた。

視察を終え、隴川県の高（ガオ）副知事と会食する機会を得た。高副知事は北京の中央政府から隴川県に派遣された人物で、隴川県を中国の多くの省や自治州・県のような工業化、都市化ではなく、隴川県の豊かな果物や作物による農業と南国の自然を基にした観光で発展させることを主眼にしているようだった。隴川県における行政の難さについても隠すことなく語ってくれた。農村部と市街部の地域差や多様な少数民族による言語の違い、習慣の違い、生活意識の違いなどが隴川県の発展を遅らせる原因になっている。話題が日本の地震に及んだとき、なによりも、日本の学校や公共施設が災害の際に避難所として機能するように作られていることに感心していた。と同時に、避難所生活においてもゴミがないこと、日本人が秩序ある行動をしていることを賞賛していた。清潔で秩序ある隴川県を作るために学校教育・学校設備の充実が急務だと言っていた。子供たちの健全な育成のため、少数民族の自立のためにも。

最近、温家宝首相が全人代で「日本に学べ」と言ったそうだ。が、ある公務員氏は「だが、国から金はでてこない」と嘆いていた。「苦労しているのは現場の人間で、日本も同じです」と慰めたところ、公務員氏は苦笑いをしていた。世界2位の国力はいつ、どこに活かされるのだろうか。

【上】徳宏自治州の州都潞西（芒市）市の新たなランドマーク「大仏塔」。街並みはミャンマーを思わせる。【中】芒市勐戛稳小学校の校舎は元は中学校。香港華僑の寄付によって建てられた校舎のみを残してすべてを立て替える。生徒宿舎は既にでき上がっていた。【下】李校長はこの村の出身。扬教育局長の教え子の一人でもあり、全霊をかけて学校教育に取り組んでいる。

隴川民族小学校の学校農園と飼育している豚。「お金がないなら、自分で作る」ということらしい。

文・写真・編集　平田栄一／ Copyright@2011 by Eiichi HIRATA